1　はじめに

これからの一歩

園木　孝志

平成 26 年 3 月末で第 2 代教授の中熊秀喜先生が本学を辞され、福岡徳洲会病院の院長に就任されました。先生は平成 15 年 6 月の本学御着任以来、血液内科の臨床・研究・教育の基盤を整えられ、病院中央部門輸血・血液疾患治療部から医学部血液内科学講座への改変を成し遂げられました。先生のご努力は大変なものであったと思います。先生のご尽力にあらためて感謝申し上げます。その後、平成 26 年 9 月 1 日付けで私が第 3 代教授職を拝命いたしました。大変名誉と感じるとともに身の引き締まる思いでございます。これまで同門の先生方が築いてこられました実績をもとにして、臨床・研究・教育に新たな発展を期しているところです。

和歌山県立医科大学附属病院は県内唯一の県立総合病院です。県民の皆様の期待に応えるよう、同種造血幹細胞移植などの「高度集学的治療」を積極的に行っていきたいと思っています。また、和歌山県は人口あたりの血液内科専門医が少ないため、血液診療でお困りの先生方が多いのではないかと推察しております。したがって、血液疾患で困ったら相談にのっていく「敷居の低い診療科」でありたいと思っております。「何でも診ていきましょう」という姿勢が、自然によってそっと隠されている真理の発見につながるのではないかと期待しています。

血液内科の患者さんの約 8 割は血液ガンです。白血病や悪性リンパ腫といった血液ガンは他のガンに比較して若年層にも発生します。私は「なんとしてでも治して社会や家庭に帰りたい」という患者さんの強いお気持ちに是非応えたいと思っています。そこで、私達の研究は「血液ガンを治す」ことを目標にしたいと考えています。

医学部血液内科学講座にとって、血液診療の将来を担う医療人の育成は最重要課題です。私は「高い専門性」と「広い総合性」は互いに補完すると思います。専門性に基づいて血液疾患に立ち向かっていく若者達、総合的診療の一環として血液疾患に携わる医療者をしっかりと応援していきたいと考えています。

私は、皆様方が「自分の人生において血液診療に関わったことはよい経験であった」と感じられるような教室・病棟・外来の運営を心がけてまいります。ご支援いただきますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

２　教室現況

（１）教室員

医局	教授	園木孝志	
	准教授	花岡伸佳	
	助教	西川彰則	
	学内助教	村田祥吾	（大学院生）
	学内助教	細井裕樹	（大学院生）
	自治医大卒研修生	蒸野寿紀	（大学院生）
		栗山幸大	（大学院生）
	学内助教	山下友佑	（4 月 1 日～）
	学内助教	小畑裕史	（4 月 1 日～）
	学内助教	大岩健洋	（4 月 1 日～）
	非常勤	綿貫樹里	
	出向	なし	
	研修医	田村忠彦	（1 月 1 日～3 月 31 日）
		浅江仁則	（2 月 1 日～2 月 28 日）
		山下友佑	（2 月 1 日～3 月 31 日）
		中尾友美	（4 月 1 日～5 月 31 日）
		竹本典生	（4 月 1 日～6 月 30 日）
		寺田幸誠	（4 月 1 日～6 月 30 日）
		弘井孝幸	（4 月 1 日～6 月 30 日）
		吉原知里	（4 月 1 日～6 月 30 日）
		佐藤知香	（7 月 1 日～8 月 31 日）
		稲垣貴也	（7 月 1 日～9 月 30 日）
		坂口香澄	（7 月 1 日～9 月 30 日）
		永井さくら	（7 月 1 日～9 月 30 日）
	秘書	花井宏実	
		矢田尚子	
輸血部	主査	松浪美佐子	
	副主査	堀端容子	
	副主査	中島志保	
	副主査	冨坂竜矢	（4 月 1 日～）
	医療技師	平康雄大	（～3 月 31 日）
	医療技師	峯　梓	

（２）役割・責任体制

園木：科長、教育主任（4 年生臨床医学講座「オーガナイザー」、学生臨床実習など）、卒後研修委員、身体障害者福祉専門分科会審査部会委員、和歌山県エイズ対策推進協議会委員、原爆被爆健康管理手当等認定医、更正医療担当、リハビリテーション部運営委員会(リハビリテーション部)
腫瘍センター放射線治療委員会(経理課)、研究活動活性化委員会

花岡：副科長、病棟医長、（入退院，当直表・日誌）、各科代表者薬事委員会、保険請求担当医（入院、DPC、レセプト）、リスクマネージャー、研究主任、栄養管理委員、感染予防対策委員、
保険請求担当者会議

西川：外来医長、保険請求担当医（外来）、オーダリングシステム入力責任者、電子カルテプロジェクトメンバー、予約メンテナンス管理責任者、職場研修委員、人権同和研修委員、和歌山県骨髄移植対策協議会委員、移植調整医師、和歌山県献血推進委員会、がん診療拠点病院担当医、がん化学療法プロトコール委員会、腫瘍センター化学療法委員会(経理課)、レジメン審査委員会(薬剤部)

秘書：慶弔・渉外、薬の説明会

（３）人事異動

教授	退職	中熊秀喜（～3 月 31 日）
助教	退職	栗本美和（～3 月 31 日）
助教	退職	綿貫樹里（～5 月 31 日）
非常勤医師	採用	綿貫樹里（6 月 1 日～）
学内助教	採用	栗山幸大（4 月 1 日～）
学内助教	退職	栗山幸大（～6 月 30 日）
学内助教	入局	山下友佑（4 月 1 日～）
学内助教	入局	小畑裕史（4 月 1 日～）
学内助教	入局	大岩健洋（4 月 1 日～）
医療技師	転出	平康雄大（～3 月 31 日）
医療技師	転入	冨坂竜矢（4 月 1 日～）

（1）臨 床 実 習

平成 26 年 9 月～

血　液　内　科

集合場所：**研究棟 10 階**　<u>血液内科医局</u>（内線 5453）

総括の後、レポートを訂正し、血液内科医局の秘書机に一部提出すること。

（訂正したレポートを提出しない場合、実習を履修しなかったと判断する。）

☆コピーは病棟で行わず医局で行うこと☆

日付	8　9　10:30　12:30　13　14　15　16　17～
/（/）月	第 1 週目 実習の楽しみ方（園木教授） 第 2 週目 症例学習 症例学習 症例学習【第 1 週目テーマ決定】（主治医） 17:00-19:30 ﾁｬｰﾄ ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ 5 西 CR
/（/）火	8:30-10:00 入院患者廻診（園木教授/花岡准教授） 症例学習 12:30-薬の説明会（第 1 週目 血内医局） 症例学習 第 1 週目 14：00－16：00 血球形態を学ぶ（花岡准教授）5 西 CR 第 2 週目 症例学習 症例学習
/（/）水	症例学習 症例学習 第 1 週目 14:00-15:00 輸血部実習（松浪主任） 第 2 週目 症例学習 症例学習
/（/）木	第 2 週目 8:00-8:30 ｶﾝﾌｧﾚｽ（CC/MGH） 第 1 週目 外来・内科診察（園木教授） 症例学習 症例学習 第 1 週目 症例学習 第 2 週目 16:00-HIV 感染症を把える（園木教授）5 西 CR
/（/）金	症例学習 症例学習 第 1 週目 症例学習 第 2 週目 16:00-ﾚﾎﾟｰﾄ発表会/ﾚﾎﾟｰﾄ提出（園木教授）5 西 CR ※ﾚﾎﾟｰﾄは全員分と教官用を準備

教官から指摘を受けた箇所を訂正し、必ず医局に**本日中に**提出すること。

自ら考え,自ら行動しましょう。

主な活動内容

(1)　学会および研究会

1)　全国学会

細井裕樹、花岡伸佳、村田祥吾、蒸野寿紀、栗山幸大、西川彰則、栗本美和、田村志宣、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「当院で経験した同種移植後後期腹水症の検討」第 36 回日本造血細胞移植学会総会、3 月 7～9、沖縄

島貫栄弥、花岡伸佳：「Limited benefit bendamustin salvage therapy for secondary CNS involvement in a patient with DLBCL / 難治性中枢神経浸潤を伴うびまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫に対する Bendamustin 効果の検討」、第 12 回日本臨床腫瘍学会学術集会、7 月 17 日、福岡

村田祥吾、花岡伸佳、畑中一生、栗山幸大、細井裕樹、蒸野寿紀、西川彰則、田村志宣、園木孝志、中熊秀喜：「造血器疾患治療における Real-time AUD monitoring system を用いた耐性菌抑制効果の検討」、第 76 回日本血液学会学術集会、10 月 31～11 月 2 日、大阪

Hiroki Hosoi, Takashi Sonoki, Shinobu Tamura, Kodai Kuriyama, Toshiki Mushino, Shogo Murata, Akinori Nishikawa, Kazuo Hatananaka, Nobuyoshi Hanaoka, Ken-ichi Imadome, Kouichi Ohshima, Hideki Nakakuma, :Establishment of a novel $CD4^{+/}CD8^{+}$ T-Cell line, WILL4, from a T-LBL showing clonal EBV infection. 第 76 回日本血液学会学術集会、10 月 31～11 月 2 日、大阪

2)　地方学会

小畑裕史、田村志宣、早川佳奈、早川隆洋、谷口文崇、木村りつ子、那須英紀、中野好夫、藤本特三：「特発性間質性肺炎に対しシクロホスファミド長期内服加療中に発症した治療関連骨髄異形成症候群の一例」、第 82 回和歌山医学会総会、7 月 6 日、和歌山

山下友佑、花岡伸佳、蒸野寿紀、栗山幸大、村田祥吾、細井裕樹、西川彰則、園木孝志：「透析患者に合併した寒冷凝集素症の一例」、第 82 回和歌山医学会総会、7 月 6 日、和歌山

村田祥吾、 花岡伸佳、 大岩健洋、 小畑裕史、 山下友佑、 栗山幸大、 細井裕樹、 蒸野寿紀 、西川彰則、 園木孝志：「同種造血幹細胞移植における NKG2D 介在性免疫の臨床的意義」第 42 回和歌山悪性腫瘍研究会（WAMT）、12 月 13 日、和歌山

3)　その他（研究会等）

花岡伸佳:「成人の造血器腫瘍」、平成 25 年度日本臨床検査技師会近畿支部血液検査研修会、2 月 15 日、和歌山市

栗山幸大：「当院と他施設での造血幹細胞移植の診療経験について」、和歌山同種造血幹細胞移植懇話会、和歌山医大高度医療人育成センター5 階中研修室、6 月 24 日、和歌山

西川彰則：「骨髄腫における自家移植後のレブラミド治療について」、Wakayama Myeloma Forum、ホテルアバローム紀の国、7 月 11 日、和歌山市

西川彰則：「初発多発性骨髄腫の CyBorD 療法」第 1 回和歌山県 MM 懇話会、10 月 18 日、ホテルアバローム紀の国、和歌山

園木孝志：「骨髄腫治療のこれまで」、第 4 回紀州血液塾、ダイワロイネットホテル、11 月 7 日、和歌山

4) 海外または国際学会

該当なし。

(2) 学術論文

1) 和文原著

該当なし。

2) 英文原著

Hiroki Hosoi, Takashi Sonoki, Shogo Murata, Toshiki Mushino, Kodai Kuriyama, Akinori Nishikawa, Nobuyoshi Hanaoka, Koichi Ohshima, Ken-Ichi Imadome, Hideki Nakakuma :Successful Immunosuppressive Therapy for Severe Infectious Mononucleosis in a Patient with Clonal Proliferation of EBV-infected CD8-positive Cells. Internal Medicine (in press)

3) 和文総説

花岡伸佳、中熊秀喜：寒冷凝集素症。血液内科　68（6）828-832, 2014

4) 英文総説

該当なし。

(3) 著書(単行本、シリーズもの含む)

該当なし。

(4) その他の印刷物(研究成果報告集、学会抄録集、寄稿文など)

該当なし。

(5) 研究費、助成金

園木孝志：平成２６年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）B 細胞性腫瘍発生における microRNA142 過剰発現の役割

花岡伸佳：平成２６年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（代表)、特発性造血障害における NKG2D リガンド発現の臨床的意義の確立

花岡伸佳：平成２６年度厚生労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の用化研究事業（再生医療関係研究分野)）（分担)、iPS 細胞を活用した血液・免疫系難病に対する革新的治療薬の開発

(6)　支援研究会など

免疫療法セミナー（帝人ファーマ社主催）：悪性腫瘍に対する免疫・遺伝子医療の現状、自験例を中心に、谷健三朗（九州大学病院先端分子・細胞治療科)、和歌山医大高度医療人育成センター5 階大研修室、1 月 28 日、和歌山

トレアキシン Meet the Expert （エーザイ社主催）：低悪性度 B 細胞性リンパ腫治療の最近の動向、永井宏和（名古屋医療センター血液・腫瘍研究部)、和歌山医大高度医療人育成センター5 階大研修室、2 月 14 日、和歌山

トレアキシン Meet the Expert（エーザイ社主催）：Richter 症候群の一剖検例、大島孝一（久留米大学病理学教室)、和歌山医大高度医療人育成センター5 階大研修室、2 月 14 日、和歌山

血液内科セミナー（イーライリリー社主催）：造血器腫瘍の染色体転座、三浦偉久男（聖マリアンナ医科大学血液・腫瘍内科)、和歌山医大病院棟 4 階臨床講堂Ⅱ、2 月 18 日、和歌山

第 3 回和歌山県 DIC 治療セミナー（旭化成社主催）：敗血症の治療において抗凝固治療法は必要なのか？～実臨床および基礎研究の知見をふまえて～、阪本雄一郎（佐賀大学医学部救急医学講座)、和歌山医大高度医療人育成センター5 階大研修室、3 月 7 日、和歌山

第 12 回和歌山造血細胞療法研究会（共催、アステラス製薬）：サイコオンコロジーについて、大西秀樹（埼玉医科大学国際医療センター精神腫瘍科)、ホテルアバローム紀の国、3 月 15 日、和歌山

第 12 回和歌山造血細胞療法研究会（共催、アステラス製薬）：臍帯血移植について、谷口修一（虎の門病院)、ホテルアバローム紀の国、3 月 15 日、和歌山

Wakayama Myeloma Forum（セルジーン社主催）：新規治療薬を用いた多発性骨髄腫の治療戦略、石田禎夫（札幌医科大学消化器・免疫・リウマチ内科学講座)、アバローム紀の国、7 月 11 日、和歌山

造血幹細胞移植セミナー（中外製薬主催）：造血幹細胞移植後の LTFU 外来における看護実践について、土井久容（神戸大学医学部付属病院）、ホテルアバローム紀の国、9 月 26 日、和歌山

造血幹細胞移植セミナー（中外製薬主催）：移植患者の感染対策、高坂久美子（名古屋第一赤十字病院）、ホテルアバローム紀の国、9 月 26 日、和歌山

第 4 回紀州血液塾（共催、中外製薬）：骨髄腫治療の現状と展望、飯田真介（名古屋市立大学大学院医学研究科）、ダイワロイネットホテル、11 月 7 日、和歌山

(7)　海外出張

該当なし。

５　診療実績

（１）入院　患者総（のべ）数（一時退院後を含む）　256 名
　　退院　患者総（のべ）数（一時退院を含む）　266 名
（２）外来
　　患者総（のべ）数　6619 名
　　内新患者数　210 名

入院患者疾病別分類（入院のみ，重複あり,疑い症例を含む）

１）白血病	73
急性骨髄性（単球性等）	
M0	(1)
M1	(4)
M2	(17)
M3	(1)
M4	(3)
M5	(9)
M6	(5)
MDS→AML	(5)
急性リンパ性(ALL)	(19)
慢性リンパ性(CLL,SLL,PLL)	(9)
２）骨髄異形成症候群（MDS）	6
３）リンパ性腫瘍	120
非ホジキンリンパ腫	(101)
ホジキンリンパ腫	(14)
成人Ｔ細胞白血病／リンパ腫	(5)
４）形質細胞腫瘍	30
多発性骨髄腫(MM)	(28)
形質細胞性白血病(PCL)	(2)

５）血球減少症（造血不全含む）		17
	再生不良性貧血	(5)
	発作性夜間ヘモグロビン尿症(PNH)	(2)
	汎血球減少症	(2)
	血小板減少症（ITP 等）	(6)
	血栓性血小板減少紫斑病	(2)
６）溶血疾患		4
	自己免疫性溶血性貧血	(2)
	寒冷凝集素症	(2)
７）骨髄増殖性腫瘍		16
	慢性骨髄性白血病(CML)	(14)
	慢性骨髄単球性白血病	(1)
	多血症	(1)
８）感染症		0
	HIV 感染症（エイズなど）	(0)
９）その他		8
	造血幹細胞移植ドナー入院	(8)

（３）造血幹細胞移植

１）自家移植	20
２）血縁	3
３）非血縁	17

（４）死亡	11 名
（５）剖検（率）	2 名（18%）

6　リーダーレポート

血液内科、第三幕へ

医局長、病棟医長、研究主任、輸血部次長/准教授　花岡伸佳

昨年度に引き続き病棟医長と研究主任を務めさせて頂きました。１月の異動により輸血部業務も行っていましたが、９月からは園木先生の教授就任に伴い医局長も拝命（兼務）いたしました。
盛りだくさんの一年を振り返りたいと思います。
＜医局＞本年度は教室にとって大きな転換期となりました。春には、血液内科の講座昇格に尽力され教室発展の礎を築かれた中熊秀喜教授の退官、教室設立当時を知る栗本美和先生と綿貫樹里先生の退職、蒸野寿紀先生の高野山総合診療所と栗山幸大先生の海南医療センターへの転出、さらに後期研修医の救急応援なども重なり、これまでの努力により改善しつつあった人手不足という危機が突然再来しました。しかし、一陽来復、山下友佑先生、小畑裕史先生、大岩健洋先生の若き有望な3名の先生（後期研修医）が救世主のように現れ教室を救ってくれました。加えて、９月には我々の最長兄である園木孝志先生の教授就任により教室も一層活気づき、この勢いでＶ字回復をと願っています。

＜病棟＞病棟担当医不足で７月からは、実質、後期研修医 2 名を主力として運営しました。病床数は 24 から 21 に減少しましたが、稼働率は病院トップクラスの 90%以上を保ち続けました。この状況で何とか事故なく過ごせたのも、フットワークの軽く適応力の高い初期研修医（８名）の活躍と病棟クラークの保坂桃江さんの協力が大きかったと思います。とても大変だったと思いますが、嫌な顔一つせず本当にがんばり続けてくれたと思います。ありがとうございました。今年は、残念ながら新入局員はおりませんが、来年以降はきっと（毎年言っていますが）同じ志を持ち病棟を支えてくれる先生が現れつづけると確信しています。

＜研究＞昨年度より改修していた研究室の整備がようやく完成しました。研究機器、機材、試薬等も充実させました。研究資金も研究量以上に確保できました。今年は、村田先生、細井先生、蒸野先生が大学院 4 年、栗山先生が大学院 3 年になりました。村田先生と細井先生は 5 月から研究に専念してもらっています。6 月からは綿貫樹里先生に週 1 回研究支援をしていただきました。秘書の花井宏実さんにも実験補助をしてもらっていました。このような活性化により今年から大学院の先生達による英文論文の投稿や採用が出始めました。この調子で早く学位取得できるように支援していきたいと思います。

＜輸血部＞例年通りほとんどは松浪美佐子主任におんぶに抱っこ状態で運営され、今年も事故なく、高度医療の実践を支えてくれました（詳細は松浪さんの項で）。11 月 15 日には、園木教授の初の大仕事であった日本輸血・細胞治療学会近畿支部総会を中熊秀喜総会長のもと無事開催することができました。

＜最後に＞11 月 29 日には、園木先生の教授就任記念祝賀会と同門会「紀杏会」の設立記念総会をホテルグランヴィア和歌山で盛大に執り行うことができました。皆様の多大なご協力や支援に感謝しますとともに、今後ともご指導、ご鞭撻、ならびにご支援を賜われば幸いに存じます。

私も平成 18 年 5 月に赴任して 9 回目のこの時期を迎えました。当初は下から 2 番目の若手で、医局員の大部分を県外者が占めていましたが（県内者 17%）、様々な先生方の協力の元、紆余曲折を経て県内出身者が医局員の大部分を占める（80%）までになりました。気付けば私もすっかり古参になっています。来年 3 月には村田先生と細井先生の 2 名が大学院を修了し、教室を引っ張っていってくれる予定で、頼もしい限りです。園木教授のもと和歌山出身者で和歌山の血液診療を行う時がついに来ました。10 余年かかりましたが、これからやっと和歌山の血液内科がスタートすると言っても過言ではないでしょう。創設期からこの素晴らしい未来への幕開けに微力ながら立ち会えたことをとてもうれしく思っています。熊本に籠っていては味わえなかったとても貴重な体験を一気にさせていただけました。この機会を与えてくださった中熊秀喜名誉教授や園木孝志教授に感謝しています。これからも、教室の発展を陰ながら応援し続けていきたいと思っています。

1 年を振り返って

外来医長・助教　西川　彰則

毎年この時期になると年報を書かないとと、期限に迫られて、徒然なるままに書き始める次第ですが、今年も多くのことがありました。前教授の中熊先生が 3 月に退官され、夏までの間、教授不在の中、医局の方向性が定まらなかったわけですが、無事、園木先生が教授に就任され、医局の将来のビジョンを示されました。医局員一丸となってやっと進みはじめたといったところでしょうか。

突然ではありますが、ここで昔に聞いた蟻の話を披露したいと思います。働きありは、共同生活を営む上で、皆がすべて一生懸命働いているわけではなく、約 2 割の蟻たちは仕事もせずに遊んでいるということです。では、次にその 2 割の蟻を取り除くとどうなるかというと残りの 8 割は、全員一生懸命働く蟻の集団になるかというとそういうわけでなく、新たにまた 2 割の怠け者ありが出現してくるということです。これはどういうことかというと全員がすべて働くより、一部が一見怠けているように見えて全体のムードメーカーであったり、緩衝役となって全体としての効率を上げているのではないかと想像します。実はここに組織の在り方についての重要な示唆があるのではないかと考えています。

今年は大変嬉しいことに大岩先生、山下先生、小畑先生と 3 人の先生が、我々の仲間に加わってくれ、病棟一の働きを担ってくれています。どんなに忙しくても、一生懸命に診療にあたっている姿には本当に頭が下がります。蟻に例えるわけではありませんが、今は全員が全員一生懸命血液内科を支えていますが、少し息抜きをしたり、時間がなくてもあえて普段とは違うことをしてみたりすることが、組織を健全に保つ秘訣ではないかと思っています。

今年の 2 月に初めて同種移植後の患者さんの会を、ひこばえの北山さんと一緒に開催することができました。元気になられた患者さんたちに会うことで、病棟のスタッフも勇気づけられたと思いますし、患者さん同士のコミュニケーションも図ることができて大変有意義だったと思います。また、5 月には看護師さん達、研修医の先生たちとリレーフォーライフに参加して、昼間は灼熱の中、夜は凍えながら和歌山城の公園をぐるぐる回りましたが、これも普段にはない経験でした。来年度もこういった非日常的なことにも積極的に参加していきたいと思っています。

今年も忘年会を残すのみとなりましたが、恒例の出し物を無事成功させて、新しい年を迎えたいと思います。

輸血部　主任　松浪　美佐子

気が付けば、2014 年もあと少し。例年通りリーダーレポートの提出締切を守れず、12 月 27 日になってしまいました。

2014 年 3 月で中熊先生が退官され、9 月に園木先生が教授に就任されるまで輸血部長は空席でしたが、1 月から花岡先生が血液内科の准教授から輸血部の准教授に配置換えになっていたので、業務に大きな支障はありませんでした（中熊先生の人事に感謝です）。しかし、4 月の私達、検査技師の人事異動は「問題あり」で、そのしわ寄せが、12 月以降の日・当直業務に出てきました。検査部の人員も厳しいので仕方ないのですが、来年 4 月以降状況はさらに厳しくなりそうです。輸血事故だけは起こさないようにしなくては.....。3 人目の輸血認定技師の誕生はいつになることやら.....。

2014 年を振り返って。診療用備品では「スペクトラオプティア（遠心型血液成分分離装置）」が購入できました。この装置は 21 年前に購入した備品で、現役稼働では全国でも片手に入るくらい古～い装置なんですが、毎年玉砕、今年は花岡先生とＣＥの中村技士長のおかげでやっと更新が実現できました。これ以外にも輸血部の診療用備品は古いものが多く、故障・修理不能で追加で 2 つの備品が更新されることになって、良かったなと思っていたら、もう次年度の要望調査の締め切りが....。ルーチン業務の合間に書類作成、輸血部のみんなの協力でなんとか乗り切っています。感謝です。

最後に、4 月に平康と交代で輸血部の一員になった冨坂の自己紹介で、今年のリーダーレポートを終わりたいと思います。

輸血部の主任よりご紹介をいただきました冨坂竜矢です。名前は少しややこしくて、「冨」は「わかんむり」で、下の名は「りゅうや」と呼びます。この機会に覚えていただけたら幸いです。

私は福井県で生まれ育ち、高校を卒業するまでは福井で過ごしました。大学は地元から離れたいと思い、岡山大学医学部保健学科、さらに同大学大学院保健学研究科に進学しました。専攻は病理学で、胸腺腫を中心に研究をする日々でした。卒業後は関西での就職を希望し、縁あって当院に就職することが出来ました。

就職してすぐ配属になったのは血液検査室でした。凝固検査担当の時、第Ⅴ因子に関する症例に出会い、学会発表をしたことが印象に残っています。この時に血液内科の先生方にお世話になりました。その後は、生化学検査室、一般検査室、免疫血清検査室などを経験し、今年度の異動で輸血部に配属となりました。配属になるまでも輸血に関する業務は当直で経験していましたが、その内容は一部の限定的なものであり、ルーチン業務に携わるようになってから輸血検査の複雑さとその奥深さにただただ驚くばかりでありました。最初はルーチン業務を覚えるのに精一杯でしたが、現在は輸血部の諸先輩方のおかげでようやく慣れてきたところです。これからも日々精進しますので、どうかよろしくお願いします。

看護師長　西口知子

来年こそは、良い年になりますようにと祈ったのがついこの前のことのように思いますが、早いもので 2014 年ももうすぐ終わろうとしています。みなさまにとって今年はどんな年だったでしょうか？私にとって 2014 年は、5 階西病棟に異動して 3 年目、ようやく看護師長として落ちついて仕事ができた年だったと感じています。

5 階西病棟では、造血幹細胞移植や緩和ケア、そして HIV と専門性の高い分野の看護を提供しています。そこで今年は、看護の質向上と充実を目標にがんばってきました。目標達成のためには、専門知識を向上することが最も必要であり、学会や研修会、セミナー等への参加を積極的にすすめてきました。

まず、3 月には昨年の看護研究の成果発表の場として、沖縄での造血細胞移植学会に 4 名が参加しました。また、移植後フォローアップ外来のための研修会に今年も 1 名が参加し、11 月には、大阪市大へ病院見学を兼ねた研修に 2 名が参加してきました。和歌山で第 2 回の造血幹細胞移植セミナーも開催され多くのスタッフが参加しました。この他に、HIV 研修会や緩和ケア研修会、死の臨床研究会等にも多くのスタッフが参加し、専門知識向上に努力できた年であったと考えています。今年の成果を、来年の実践に繋げてくれることと期待しています。

看護体制については、移植後フォローアップ外来立ち上げのため、今年 4 月から血液内科外来との統合が実現しました。何とか患者指導の時間をと考え苦労してきましたが、残念ながら人員や看護力の問題で外来看護の充実までには至りませんでした。ただ、研修受講した二人が着実に準備を進めてくれていますので、来年早々に移植後の LTFU 外来を開始できると考えています。

毎年人員不足に泣かされていますが、特に今年の 12 月は、今までにない大ピンチを迎えました。それでも、大きな問題なく過ごせているのは、スタッフの努力の賜物だと感謝しています。そして、ご協力をしていただきました先生方にも心から感謝いたします。

最後になりましたが、園木先生、教授ご就任おめでとうございました。新体制となりましたが、病棟が変わらずにいられることをうれしく思っています。来年も更によりよいチーム医療を目指して頑張っていきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

薬剤部　佐野尚平

今回、初めてリーダーレポートを書かせていただきます血液内科病棟を担当している佐野です。私は、病棟薬剤師としては２年目を迎えることになりますが、まず薬剤師を取り巻く医療環境について少し書かせていただきます。近年、６年制の薬剤師が誕生し、２０１２年には病棟薬剤業務実施加算が新設されました。また、薬物療法の重要性が増大している中で、医療や患者の安全性を確保するために薬剤師の役割も大きく変化しており、チーム医療において薬剤師は多くの医療職種と協同、連携を介して、薬物治療の質の向上と安全確保の要としての役割を果たすことが求められています。

私が病棟に配属された初期の頃は、薬剤師が病棟で何をすればいいのか？右も左もわからない状態でしたが、今年で 2 年目となり、病棟での薬剤師業務も確立したものとなってきました。私の主な業務内容は、（１）入院時の持参薬の鑑別、（２）内服薬、注射薬の処方監査、内容確認、（３）検査データ、病歴、薬歴などを基にした薬物相互作用、副作用モニタリング、（４）服薬指導などの薬剤管理指導、（５）医師、看護師など医療従事者への薬剤情報の提供、（６）薬物血中濃度モニタリング（TDM）による投与設計、（７）カンファレンス、教授回診への参加、（８）病棟定数配置薬の管理です。以上の病棟薬剤業務を実施するにあたり、血液内科の先生方や 5 階西病棟の看護師さん、病棟クラークの保坂さんにはいつも親切に接していただき本当に感謝しています。

今後の展望について少し書かせていただきます。京都大学医学部附属病院（以下京大病院）を始め、様々な病院で実施されているプロトコルに基づく共同薬物治療管理 CDTM(collaborative drug therapy management)を当院血液内科で実践できるようにしていきたいと考えています。CDTM とは、医師と事前にプロトコルを作成し、薬剤師が薬学的介入を行ったうえで、処方や検査を提案する薬物治療管理を行うことです。京大病院における CDTM プロトコルは、「持参薬の処方」、「定期 Do 処方、提案」、「修正オーダ権限」、「TDM 入力」、「化学療法時の B 型肝炎ウイルスオーダ」などがあります。薬剤師は日本の法律上、検査のオーダや処方箋の発行は原則できないため、医師業務の代行は、医師の確認が必須とされますが、CDTM が実践されれば、薬物療法の適正化、質の向上に加え、医師の業務負担の軽減につながります。

まだまだ未熟な私ですが、薬に関することについてはすべて責任を持つ覚悟で、ファーマシューティカル・ケアを介して、最適な薬物治療の提供と医療安全の確保に努め、医療に貢献できるよう頑張りたいと思いますので、これからもよろしくお願いいたします。

7　寄稿文

2014 年を振り返って

独立行政法人労働者健康福祉機構
和歌山ろうさい病院　血液内科　　阪口　臨

2014 年の報告をいたします。

まず、年始に、当院主催の市民公開講座で、“がんと向き合うために”と題して、講演を主宰しました。サブタイトルは、“～化学療法と緩和ケア～”とし、当院におけるがん治療の現況を伝え、入院だけでなく、通院でも在宅でも等しく医療を受けていただける環境を整備していることを話しました。これには、外来での化学療法センターや緩和ケアチーム、在宅訪問看護や往診との連携が不可欠ですので、それぞれの部署のスタッフも交えて講演しました。最後に、聴講された皆さんからの質問に、講師陣がその場でお応えする座談会も開催し、好評を得ました。その中で、患者さんや、そのご家族の立場からは、“どんな些細なことでも不安になるので、それをいつでも相談できることがうれしい”とのご意見がありました。私共医療スタッフにできることは、医師や看護師や薬剤師など、どんな立場であっても、まずは相談窓口として患者さん側から発せられるシグナルを受け止めていくことが、不安を安心に変える力となり、何より大切なことではないか、と感じた次第です。

また、外来通院での抗がん剤治療の受け皿である化学療法センターや、がんによる苦痛に対する医療を総合的に構築していく緩和ケアチームなどの活動は、昨年に引き続き、様々な部署のスタッフに助けられながら、微力ながら継続しています。

最後になりますが、貴医局教授に園木孝志先生がご就任されましたこと、心よりお慶び申し上げます。

今後とも、ご指導ご鞭撻よろしくお願いいたします。

２０１４年を振り返って

昭陽会　綿貫整形外科　　内科　綿貫樹里

私の 2014 年は、2013 年に引き続き医局で慌ただしく始まりました。
１月～４月　試験監督デビュー、授業デビュー、１０年間お世話になった中熊先生の御退官。

５月　主人の綿貫整形外科のお手伝いをするべく移動。内科外来開始。（常々　整形外科に通院患者の内科疾患フォローをしてほしいとの主人の希望がありまして・・。）医局には、週に一度（木曜日）で実験のお手伝いを続けることになりました。

９月　園木先生の教授就任。
１２月　同門会「紀杏会」発足。
中熊先生の御退官は、２０１３年から既に予定されておりましたが、やはり感慨深いものでした。中熊先生が教授に就任された日が昨日のことのようにとは言いませんが、思い出さずにはいられませんでした。少ない医局員（私は一番下っ端で）と動いていない研究室・半講座の医局に赴任してこられた中熊先生。これからどうなるのか不安を持ちながらも１０年後の血液内科はもっと大きな医局になっているのかなと期待したのを覚えています。その時の私には、次の教授選が１０年後にあるなんて思ってもいませんでした。それから１０年、医局員の人数は倍増し、大学院生がいて、研究室は毎日誰かが実験をして、医局も広くなり、何よりも医局の雰囲気が明るくなっている（若くなっている？？）気がします。
そして、園木先生の教授就任。これまでの園木先生のご尽力を考えると当然とは思いますが、自分たちの血液内科准教授からの就任が何よりも嬉しい日でした。10 年前より人もスペースも大きくなったとはいえ、まだまだ成長のする余地のあるこの医局がまた一歩前進した日と感じました。そして、私は再び 10 年前と同じようにこの医局の未来に根拠もなく期待しているのです。今年もこの年報のおかげで 1 年を振り返ることができました。来年はどんな年になるのか楽しみです。

和歌山県初となる“JMECC（ジェイメック：Japanese Medical Emergency Care Course、日本内科学会認定内科救急・ICLS 講習会)”を開催して

紀南病院血液腫瘍内科　田村志宣

平成16年から実施されている初期臨床研修制度では、救急医療への取り組みが重視され、二次救命処置を含む救急蘇生講習会（ACLS・ICLSなどを指します）の受講がカリキュラムに含まれております。この状況を踏まえ、日本内科学会では、認定内科医資格認定試験の受験資格に、救急蘇生講習会の受講が要件となっていました。しかしながら、受験者の中には、初期臨床研修制度施行以前に臨床研修を受けた先生方や、様々な事情により、救急蘇生講習会の受講が出来ない先生方がおられました。そこで日本内科学会では、救急蘇生講習会の受講機会を提供すべく、独自の策定基準で救急蘇生講習会を実施していくことが同年から検討されていました。

折しも、救急医療の崩壊など、救急医療への社会的要請が高まっている実情を踏まえ、単に認定内科医試験の受験者に留まらず、すべての内科医がいかに救急医療に貢献できるのか、更なる検討も行われました。その結果、救急医療に接することの少ない内科医が、**心停止時のみならず、緊急を要する急病患者に対応できるように**、日本救急医学会策定の「ICLS」を基礎に、日本内科学会独自の「内科救急」をプログラムに導入した講習会を実施することになりました。日本内科学会では、この取り組みにあたり、「救急委員会」が組織され、本講習会の名称を「JMECC（ジェイメック：Japanese Medical Emergency Care Course、日本内科学会認定内科救急・ICLS講習会)」とされ、平成21年11月1日に初めての講習会が福岡で開催されました。私の初めての参加は、平成22年5月の徳島で開催されたJMECCでしたが、当時は自施設で開催することになるとは夢にも思っておらず、半ば観光がてらの参加でした。初めての参加以降は、約2年以上JMECCを受講していませんでした。

月日は流れ、第28回（平成24年度）の認定内科医資格認定試験からJMECC受講が推奨され、そして平成26年度からは大学病院、平成28年からは教育病院での開催が義務づけられるようになりました。平成24年度から具体的にJMECCが教育病院のカリキュラムの中で重要視される項目の一つとなり、自施設でのJMECCの開催がなければ、教育病院の資格を失うことが提示されるようになりました。当院は、和歌山県の中で日本内科学会認定教育病院の一つに指定されております（あとは和歌山県立医科大学・日本赤十字社和歌山医療センターです）。よって、当院は、教育病院として臨床研修医かつ内科を志す医師の研修・教育に努めることが使命であり、そのカリキュラムの一貫としてJMECC開催に取り組む必要がありました。平成24年夏の時点でJMECCが教育病院の中でどのように扱われるか見通しがたっていない状況でしたが、同時期に当院の藤本副院長から自施設開催の命を受けることになりました。それ以降、JMECCのインストラクターとして時間の許す限り参加することになりました。

しかしながら、JMECCの参加の中で痛感したことは、緊急を要する急病患者の対応はもとより、心停止の患者の対応すらも私自身未熟であったことでした。平成25年度からは、参加希望に比較し開催コースが少ないという問題点があり、JMECCに参加することが困難となりました。そこで自己研鑽も兼ねて、平成25年秋から心停止の患者の対応を研修するICLS（Immediate Cardiac Life Support）のインストラクターとして京阪神の病院で開催される

コースを中心に参加するようになりました。ICLSでは、様々なメディカルスタッフの方々（救急救命士さん・看護師さん・検査技師さん・臨床工学士さんなど）と一緒になって受講生を指導し、心停止の患者を社会復帰させるためのチーム医療をいかに行っていくかディスカッションを重ねることができました。ICLSのインストラクターとして参加される多くの方は医師ではないですが、皆さん経験豊富であり、脱帽の連続でした。ICLS・JMECCのコースを参加することで、様々なつながりができ、多くのアドバイスを頂くことができました。私一人では何もできませんが、病院をあげて皆で協力し合えれば、JMECCの開催は可能だろうと判断しました。そこで、平成26年4月に和歌山県初となるJMECCを開催することを決定しました。当院の様々なメディカルスタッフの方々に多大なる協力を得て、自施設開催が現実味となり、そして可能となりました。ディレクターについては、京都医療センター救命救急センターの田中博之先生にお願い、日本赤十字社和歌山医療センター第一救急科部の浜崎俊明先生にも御協力を頂きました。

平成26年11月30日（日）に当院講堂で和歌山県初となるJMECCを無事開催することができました（写真）。今回は、“1ブース 6人”でしたが、受講生の先生方にも大変好評であり、来年度以降も自施設開催を継続していく予定となっております。心停止時かつ緊急を要する急病患者の対応については、急変の多い領域である血液内科にとって重要な研修事項と考えております。それは、血液内科に関わるメディカルスタッフにも同じことが言えることだと思います。平成27年度は、私自身、ICLS・JMECCのディレクター取得を目標として活動する予定で、和歌山県のいくつかの施設でコース開催を行う予定にしております。時間が許されるのであれば、皆様の奮ってご参加お待ちしております。

そして、私が、平成26年7月に血液内科指導医を取得できましたので、平成27年4月から当院を血液内科学会の研修施設へ申請しております（和歌山県では3施設目）。審査の結果は平成27年2月頃となりますが、当院でも血液専門医の研修が可能かもしれませんので、若い先生方の研修これまたお待ちしております。

11月30日（日）　紀南病院講堂で

JMECCのロゴ

年報に寄せて～2014 年を振り返る～

高野町立高野山総合診療所
総合診療科　蒸野　寿紀

卒後 8 年目の 2014 年。自治医大の義務年限も残り 2 年となり、4 月からは高野山総合診療所で勤務しています。高野山は空海により開創された仏教の聖地で、その静謐な雰囲気は多くの人々を惹きつけます。診療所はそんな高野山の中心から一歩入った場所に位置し、地域住民約 3000 人のプライマリ・ケアと旅行者の医療を担っています。標高約 800m に位置しているため、夏は涼しく過ごしやすいですが、冬は最高気温が氷点下となる厳しい環境です。最近見た血液疾患は巨赤芽球性貧血ぐらいですが、内科疾患の救急から骨折などの外傷、小外科処置まで貴重な経験ができています。最近高野山は、National Geographic Traveler の Best Trips 2015 で、2015 年に訪れるべき 20 の場所に日本で唯一選ばれました。また来年は開創 1200 年記念大法会が開催され、さらなる観光客の増加が予想されるため、世界遺産の名に恥じぬような水準の医療を提供したいと考えています。

今年は思いがけず入院を経験しました。5 月下旬、診察室の腹部エコーでたまたま発見した約 3cm の腎腫瘤でしたが、CT・MRI でも良悪性の診断がつかず、8 月に手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」による左腎部分切除を受けました。手術翌日の腹部違和感・倦怠感は辛いものでしたが、腹腔鏡手術のため回復は早く、13 日間の短い入院でした。入院後半は病室やデイルームからの景色を見たり、高校野球を観戦したりして過ごしました。血液内科病棟の患者さんは長い入院期間を、外の見えない暗い病室で過ごされていたことを思い出し、環境の改善の必要性を感じました。エコーでの発見から病理結果判明まで約 3 ヶ月、自分自身や家族のことを案じ、良性腫瘍と判明した日は、ほっと胸をなでおろしたのを思い出します。医師として患者の立場を経験できたことは大変貴重であり、この経験を今後の診療に活かしていきたいと考えています。お世話になった皆様、ご心配頂いた皆様にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。また、退院後早期に職場復帰できたのは診療所の皆様の支えがあってのことと感謝しております。

2014 年は血液専門医になることができました。入院・手術を控えた最悪の精神状態での受験となりましたが、この合格はこれまでの諸先生方のご指導のおかげと感謝しております。幸い体調は元通りに戻りましたが、入院などにより自分自身の成長が停滞した 2014 年だったと感じています。2015 年は自分の体と家族を大切にし、成長の 1 年としたいと思います。今後もご指導のほどよろしくお願いいたします。

海南医療センター
栗山　幸大

2014 年 7 月から海南医療センター内科で勤務させて頂いております栗山幸大です。海南医療センターは、2013 年 3 月に旧海南市民病院から新たに開院しばかりの病院であり、スタッフの大幅な増員・新たな医療機器の導入など、病院全体として活気に溢れています。現在、海南医療センターは約 150 病床の地域に根付いた地域中核病院として、海南市のみではなく海南市周辺の有田・紀美野町・紀の川市を中心に人口約 20 万人以上の医療圏として診療を行っております。

血液内科診療に関しましては、これまでは非常勤外来という形でのみ血液診療を行っておりましたが、7 月から私が赴任させて頂き、コメディカルや他職種スタッフとの連携を取りながら、徐々に入院診療も含め、血液診療が行えるよう診療拡大をしています。2015 年 1 月現在では病院内全入院患者様の常時 1/10 程度が血液疾患患者様となっております。和歌山県立医科大学付属病院から最も近い公立病院という地理的条件もあり、同院から患者様のご紹介を頂くケースが多く、高齢者の方（悪性リンパ腫や骨髄異形成症候群など）を中心に診療を行っています。

和歌山県内における血液内科専門診療が可能な病院はまだ非常に限られており、今回海南医療センターで新たに血液内科診療を始めることができたことは、和歌山血液診療の今後の充実を図るひとつとして重要だと考えられます。今後も和歌山県立医科大学付属病院や日赤和歌山医療センターなど高度医療機関、さらには地域医療機関と連携をとり、血液診療がよりスムーズに和歌山県下で継続して行えるよう連携をとりながら従事して参りたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

園木 孝志 教授 御就任祝賀会の御案内

謹啓　秋冷の候 皆様方には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
平素は格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。
さて 園木孝志先生には 平成二十六年九月一日をもちまして 和歌山県立医科大学医学部血液内科学講座教授にご就任されました。
つきましては御懇意の皆様に御光臨を賜り この度の慶事を祝すとともに教室の更なる発展を祈念するため祝賀会を企画させていただきました。
御多用中恐縮ではございますが　万障御繰り合わせの上 御光臨賜れば幸甚に存じます。
略儀ながら書中にて御願い申し上げます。

敬白

平成二十六年九月吉日

発起人
中熊 秀喜　花岡 伸佳　西川 彰則　綿貫 樹里

記

日　時　平成二十六年十一月二十九日（土）　受付　午後　四時三十分～
　　写真撮影　午後五時～　開宴　午後　五時三十分～
場　所　ホテルグランヴィア和歌山　六階（ル・グラン）
　　和歌山市友田町五丁目十八番地
　　電話（〇七三）四二五－七七一一番
会　費　医師　　壱万五千円
　　コメディカル他　壱万円

なお、お手数ながら同封の葉書にご出欠の有無を十月二十六日までにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

[お問い合わせ先]　和歌山県立医科大学医学部血液内科学講座内　事務局
電　話　（〇七三）四四一－〇六六五
FAX　（〇七三）四四一－〇六五三
E-mail　ketunai@wakayama-med.ac.jp

紀杏会（和歌山県立医科大学血液内科同門会）設立総会の御案内

謹啓
初秋の候、皆様方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
さて、この度の園木孝志先生の教授御就任にあわせ、和歌山県立医科大学血液内科教室（その前身を含む：以下血液内科と略する）に在籍したもの及び在籍者をもって組織する同門会（紀杏会）の設立総会を、祝賀会の開催の前に執り行いたいと存じます（会員資格を有する先生に本状を同封しております）。
御多忙中恐縮ではございますが、万障お繰り合わせの上、ご参会くださいますようご案内申し上げます。

啓白

記

第一部
☆紀杏会設立総会
日時：平成２６年１１月２９日（土）　午後３時３０分～午後４時３０分
場所：和歌山市友田町５丁目１８番地　Tel: ０７３-４２５-７７１１
ホテルグランヴィア和歌山　６階　桜の間

第二部
☆教授就任祝賀会
日時：平成２６年１１月２９日（土）
午後５時００分～　記念撮影
午後５時３０分～　祝賀会
場所：ホテルグランヴィア和歌山　６階　ルグランＣ
会費：（医師・薬剤師）１万５千円（記念写真代含む）
（看護師・技師）１万円（記念写真代含む）

尚、お手数ながら同封の葉書に設立総会のご出欠の有無についても平成26年10月26日までにお知らせくださいますようお願い申し上げます。また、当日、会則の御承認をいただいた後に、平成２６年度年会費（３千円の予定）を徴収させていただきますので、よろしくお願いいたします。

平成２６年９月吉日

和歌山県立医科大学医学部血液内科学講座
医局長　花岡　伸佳

紀杏会会則

第一条　本会は紀杏会と称する。

第二条　本会は和歌山県立医科大学医学部血液内科教室（その前身を含む : 以下血液内科と略する）に在籍したもの及び在籍者をもって組織する。
但し、血液内科に特別の縁故あるものは会長の推薦によって会員となることができる。

第三条　本会は会員の親睦互助を計り血液内科の発展に寄与することを目的とする。

第四条　本会の事務所を血液内科におく。

第五条　本会に下の役員をおく。
１会長　　２名誉会員　　３名誉会長　　４理事　　５幹事

第六条　役員の選定は次の方法による。
1. 会長は血液内科教授を推挙する。
2. 名誉会長は名誉会員の中から推挙する。
3. 名誉会員は元血液内科教授を推挙する。
4. 理事は会長之を委嘱する。
5. 幹事のうち一名は血液内科医局長とし、その他は会員之を委嘱する。

第七条　役員の職責は次の通りとする。
1. 会長は本会を代表し会務を総理する。
2. 理事は会長を補佐し本会の重要事項の審議に当る。
3. 幹事は会の庶務及び会計の職に当る。

第八条　理事の任務は原則三年とする。再任を妨げない。

第九条　本会の目的を達成するため次の事業を行う。
1. 総会　　年一回会長之を招集し開講記念会を兼ねることができる。
　　但し、会長は必要に応じ臨時総会を招集する。
2. 役員会　必要に応じて会長之を招集する。
3. 名簿発行　4. 紀杏会報発行　5. 会員の研究補助　6. 会員の弔慰
7. その他役員会において必要とする事業

第十条　会員は住所、職業等に移動ある時はその都度事務所に通知するものとする。

第十一条本会の総理は会費及び寄付金等をもって充て之を会基金とし特に必要と認める時は別途徴収する。会費は年額 3,000 円とし毎年初年度より三月末迄の間に事務所に納付するものとする。但し、特別の事由を認めたる場合は役員会の決議により免除することができる。

第十二条基金は次の目的に支出する。
1. 会員死去に際しての弔慰　2. 名簿発行　3. 紀杏会報発行
4. 会員の研究補助　5. その他役員会において必要と認める事業

第十三条本会の経理状況について幹事は総会に於いて報告しなければならない。

第十四条本会会則の改正は役員会の決議を経て総会の承認を得なければならない。

第十五条総会は全会員をもって構成し、その過半数の出席を得て成立する。ただし、やむをえない事情により出席できない会員は、会長への委任状の提出により出席者の数に加える。総会の議事は、出席会員の過半数でこれを決する。

平成 26 年 11 月 29 日　制定